

## 座談会

国際化時代の  
教育と同志社

金田

弘光

大学院アメリカ研究科教授・  
大学院経済学部教授

土野

繁樹

TBSブリタニカ  
国際業務担当取締役

山田

礼子

プール学院 国際文化学部助教

斎藤

文彦

龍谷大学 国際文化学部講師

司会  
釜田

泰介

大学院アメリカ研究科長・  
大学院法学部教授

(発言順・敬称略)

釜田 きょうはお忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。本日は、「国際化時代の教育と同志社」と題してお話し合いいただきありがとうございます。諸先輩方は、いままで外の非常に広い世界から日本の大学なり、大学教育というものを考えるになる機会が多々おありになったのではないかと思います。また、その折に恐らくあわせて母校同志社の教育並びに将来というものを考えるにされることおありだったというふうには拝察している次第でございます。

きょうは私なりに二つ柱があるのではないかと思っております。いままでのこ

経験の中から日本の大学教育というものをどういう機会に、どのようにお考えになられたかということが一点。それからもう一つは、母校同志社の大学教育というものをどういうふうには評価されたか、あるいは今後同志社が何をすべきか来たるべき世紀においてな役割を果たすとしたら、どういうことをすればいいのか、またできるのか、そのあたりのことについて忌憚のないご意見をちょうだいできましたら、学内におります者にとりましては、この上ないことだというふうには思っている次第でございます。

略歴を拝見しますと、ご卒業の年代が

五〇年代、六〇年代、七〇年代、八〇年代と、戦後ここまでの五十年間余りの新制大学になってからの同志社の軌跡と合っておりますので、いろいろなことを伺いできるのではないかと思っております。どうぞございます。

年代別というのななのですが、五〇年代を過ごされた、金田先生から口火を切っていたでしょうか。

## 学生時代の同志社と国際主義

金田 私が同志社にいたころは、同志社の国際的なキャラクターというものは全

然売り物でもなかったし、べつにはつきりしたこともなかったと思いますね。

僕は同志社高校から国立大学を受けて、そのときに親から同志社大学へ帰るか、それともほかのところへ入らなくちやいけない。とにかく浪人はいけないというところで、親が言った一つが国際キリスト教大学、それが開校したばかりだった。それで私ながらに日本における「国際」とは何か、ということを一度考えたことがあるんですよ。本当に「国際」というものに意味があるのかどうか。

例えばアメリカから先生が来るということ、これはわかる。ただ、アメリカやほかの国から学生が来て、さあ自分が興味のあるようなことにあの連中も興味があるのだろうか、つまり同じような学科を同じような視点から、知的な興味から学び合う国際的な場というものがそこにあるのだろうか。そういうことを考えた。結局同志社大学に入学して、そしてラッキーなことにアモスト館にいたというところで、いわゆるアメリカ人の体臭のする生活の場で一つの生活環境というものを味わえた。だから、そこだけが本当

の国際的なと言えば国際的な場であったというような感じがするんですよ。

**土野** ぼくは六一年から六五年まで同志社で学びました。出身が下関なんです。下関というのは、ご存じのように長州藩で、明治維新以来の歴史を背負ったような感じのところがありまして、バンカラ学生として一浪して同志社にきました。

それで春たけなわのころに、岩倉出身の連中がそこらにいっぱいおるわけですよ。派手なセーターを着て、男の子と女の子が仲良くやっちゃって、下関なんていうのはそういうの何もないですから。それで何かたるんてるなというような(笑)感じがして。

このハリス理化学館のあたりに大きなイチヨウの木があって、その下でESSの連中が昼休みに練習をやっているわけです。リンカーンの例のゲティスバーグ演説をやっている。何と浅はかなことをやっているなと思つて(笑)。ぼくは何かちよつと体質が合わないと感じたのを覚えています。何で日本人がゲティスバーグ演説の練習しているのかと。そこから多くの同志社大学の生活が始まりまし

た。出発はそうでしたが、アモスト館に入り、多くの人生航路は変わりました。オーティス・ケリー館長の薫陶を受け排外から開国、国際に宗旨替えをした訳です。それ以来ESSどころではない。過去三十年間、編集者としてブリタニカ国際大百科事典とかニューズウィーク日本版とか英語をメシのタネにやってきました。あの一九六一年の春の風景は田舎者の強がりだったんですよ。

**山田** 私は七四年から七八年でして、考えたら学校の環境はあまり恵まれていない時期だったんじゃないかなと思うんですね。まず入学式の途中に学生運動の集団に入ってこられて、式がむちゃくちゃになりました。一回生のときの後期もほとんど授業がなくテストもレポートだったんです。三回生のときもストで、学校はめっちゃくちゃでした。高校時代も実は私、尼崎北高校という県立だったんですけども、そこも実は学生運動で、ほとんど一年の三学期と三年生の三学期の授業がなかったんですね。ですから、自分は一体どこにあるのかなというような時期であったと思うんですけども、で、

いま土野さんがおっしゃったようなES Sに実は入っちゃったんです(笑)。結局そこが自分の場になってしまったんですけど、でも、いまから考えますと、国際化ということではなくって、ESSって確かに会社に入ったりしてから都合のいいところなんですよね。先輩、後輩の規律とか厳しいですし、そういう時期を過ごしたんですけれども。

斎藤 私の場合は中・高・大が同志社なんですよね。大学を卒業してから、おまけにアーモスト大学に二年おりましたので、同志社には十年のみではなくて、十二年間つかってますので、大学のみを切り離すということはよくにとってはほとんどできないんですよね。そういう意味では、同志社の純粹培養人間であると言えると思うんですけれども。ですから七〇年代のときに三年間中学のある今出川キャンパスにいまして、そのときは大学がバリケードで封鎖されているのを見えますし、三年間岩倉に行って今出川に帰ってきた。学内推薦の場合、特に中学をここで過ごした人間にとっては、大学に初めて来たというのと全然違うので、よ

くも悪くもスレているわけですよ。どこに行けば飯が食えるかも知っている。そういう意味では、大学をよくも悪くもその前後とちよっと切り離しにくいというのがあるんですけれども。

国際化ということと言うと、恐らく当時も、よくも悪くも国際化を日本の社会全体に言っていた時代ではあるので、その影響をぼく自身もいろんな意味で受けていたことは間違いないと思うんです。そういうことで、最初から国際的なるものに興味があったというのもあると思うのですが、ただ、それを自分自身でどうとらえていたかというのと、よくわからないんですよ。

ぼくは法学部にいたのですけど、当時は非常に変わった学生でした。私がやっていることというのは、ほかの学生には理解されなかった。それはどういう意味かというのと、法学部の学生なのに、英語をすごく勉強していたんです。そのことを教員もそうですし、友人の多くも意味が理解できなかつた。どうしておまえはそんなに英語を勉強するんだとよく言われた。そういう意味では、非常に変わった

ていた学生であることは間違いないと思いますね。

### アメリカとの出会いと カルチャーショック

釜田 みなさんそれぞれの時代に同志社で過ごされた後、四先輩に共通の点は、海外、特にアメリカの大学へいらっしゃって、そこでまた勉学をされ、そこから日本を見られるチャンス、機会をもたれたということですよ。最初に向こうから日本の大学というものをご覧になってどういう感じだったんでしょうか。比較をされたときの最初の印象ですな。

金田 私の場合はアーモスト大学へ行きました。三年生からまたやり直したわけなんですけれども。とにかく勉強させられたということなんです。

自分では一応経済学士になっていたんだけれども、入門講座の経済学からやり直して、とにかく一週間に一度はクイズがある。クイズというのは十五分間で一つの問題に答えを書かなくちゃいけない。そして一学期の間に何べんも中間試験があつて、その上ファイナルがあると



金田 弘光氏

かねだひろみつ／'34年大阪市生まれ。同志社大学・米国アーモスト大学卒業後、スタンフォード大学大学院にて Ph. D.取得。'73年カリフォルニア大学(ディヴィス校)経済学部教授、'75年世界銀行上級エコノミスト、'94年よりカリフォルニア大学経済学部名誉教授。専門は開発経済で、国連等の数多くのプロジェクトに参画、アフリカやアジア各国の農業開発、経済開発に尽力。'96年より現職。

いうような調子の、日本で言えば、スケジュール的には高等学校式の勉強の仕方。ところが英語がアメリカ人の学生に比べてできないものだから、どうしても遊ぶ時間を削ってやらなくちゃいけない。特にそのころの日本の経済状態から考えると、アメリカで奨学金をもらわないと大学院へいけない。そのためにはアーモストでそこそこの成績をとらなくちゃいけない。だから、それも励みになってというか、むきになって頑張ったおかげで大学院へ行けたんだけど、とにかくアメリカのカレッジライフというものをエンジョイするというよりは、とにかくついていくのに大変だった。そしておまけに小遣いだって自分で稼がなくちゃいけないから食堂で働くとか、そういうこ

とをやらざるを得なかった。

だから私が本当にアメリカの大学の学生として、日本の大学のことを考える余裕ができたのは、スタンフォードの大学院へ行っただけからですね。そしてそこで本言えれば、いちばん最初に日本の大学のことを考えたのは、博士号がとれるということになってきて、私に日本の大学へ来ないかという話があったときに自分がいかにアメリカ式な考え方になっていたかということに気がついたんです。

というのは、日本の大学から来いと言われたとき、どういう条件で、どういうことを教えてというふうないわゆる雇用条件、それから私の責任ですね、義務は何か、そしてどういう環境に自分が置かれるのかということを一々聞いたわけで

す。そうしたら「そういうことは聞くものじゃない。招かれたら帰ってきなさい」と言われた。私は自分の指導教授にその話をしたわけ。そしたら、「日本というのはすごく経済的に進んでいるけれども、日本の大学というのはどうも遅れとるな。日本でいちばん未開発地域じゃないか」(笑)と言われた。そのときに本当に日本の大学というものをもう一べん見直してみようか気になったんです。それまではそれどころの騒ぎじゃなかった。

釜田 なるほど。金田先生、向こうで経済入門的なものからもう一度全部やり直したというのは、それはどういう意味ですか。

金田 日本の大学というのは各先生によ



土野 繁樹氏

ひじのしげき／41年韓国・釜山生まれ。同志社大学、米国コルビー大学卒業後、'68年TBSブリタニカに入社。「ブリタニカ国際年鑑」「ニュースウィーク日本版」編集長などを経て、'93年より現職。同志社大学時代はアーモスト館(寮)に入り、国際感覚を培う。ニュースウィーク編集長時代には天安門事件から湾岸戦争、ソ連の崩壊に至る世界の大激動期を報道。

って科目の教え方が違うし、カバレッジが違うし、レベルが違うんです。だから例えば入門の経済学をやったところで、全然経済学のカバレッジがないわけですね。そしてまた、やっていることがその先生の専門というか、そういうことに集中しちゃって、結局これだけの基礎的な、いわゆる入門式な手ほどきをしなければ、あとが続かないのだというような感じでものを教えるんじゃない。欠けているところが非常に多かったんですね。だからアーモストで初めて本当に系統だった学問のやり方をやったとほくは思っているわけですね。

これは私がカリフォルニア大学で教えだして、私が教務主任のときに日本へ留学した連中が帰ってきて、日本でとった

コースを認めてくれるというときに、いつも困ったことになるんです。科目の名前はわかっていて、だれが教えたかということとはわかっていても、どんなことをどの程度で教えたか、どんな本を使ったか、どんな論文を読ませたか、何も記録がない。そして試験問題はどんなのが出たか、こんな問題だったと言うんだけど、どんなことを学んだというのは答案なんて返してもらってない。だからそういう意味で日本とアメリカの大学はものすごく違ってたですね。大学ではいわゆる系統だった知的作業の積み立てをするのだという考え方のアメリカの大学に対し、日本の大学の先生というものは自分の知っていることを好きなようにやっていて、学生はそれを聞いて学べばいいという態度じ

やなかつたかとほくはどうも思うんですよ(笑)。

釜田 土野さん、いかがでしたか、最初アメリカの大学を体験されたときに、こっちと比較してどういうことを思われましたか。

土野 ほくはメイン州にあるコルビー大学というところに二年間スカラシップをいただいて留学したんですけども、そのとき行って一週間以内に二つばかり、カルチャーショックみたいのがありました。一つは、外国人留学生のアドバイザーがおりまして、その先生に呼ばれて部屋に行きましたら、「ミスター、ヒジノ、アーユーハッピー」という質問があったわけですよ。自分は幸せかどうかなんていうことは、ほくはあんまり考えた

ことなかつたんです(笑)。それに何と答えたか、もそもそと何か答えたと思うんですけど(笑)。宿題が多すぎて苦しいのでアトム・アンハッピーというのは、これちょっと失礼になるしね。そのものズバリの質問には答えられない文化の土壌から来たわけですからね。

もう一つは、ハーバードを出たウィルソンという日本学者がおりまして、北一輝の研究をやってましてね、奥さんは日本人で。私が日本の学生であるということと呼ばれまして、「土野、一体何のコースをとるんだ」と聞かれたわけです。ほくは「西欧比較政治をとりたい」とか「アメリカ史をとりたい」とか言ったわけです。そしたらウィルソンがほくに「日本の歴史をとつたらどうか。自分が教えてやる」と。「教科書は何ですか」と聞いたら、ライシャワーのものだとか、ドナルド・キーンのものだとか言うわけです。よ。アーモスト館におつたときにライシャワーさんもキーンさんも来て、話も聞いているしということ、アメリカまで来ていて、日本のことを何でやるかという気持ちがありますから「アメリカまで

来てとるつもりはない」と言つたら、「いや、二つの理由があるからとらなくちゃいけない。一つは君の英語力のために」これはわかります。もう一つは「君は日本の歴史を知らない」と言われまして、カツとなつて「結構です」と断りました。そのとき感じたのは、ハーバードなんか出た人の知識偏重のゴーマンさというのか、これは面白い体験でした。そんな二つのカルチャーショックみたいなものですね。

釜田 同志社で最初大学院におられましたよね。それでもう一つ盛り上がりがあったと。そしてどうでしたか、向こうへ行かれて。

土野 だからやつぱり半年ぐらいは本当に苦しいですよ。どういうことかというところ、ペーパー書かされるわけでしょう。日本でペーパーなんて書いたことないし、まして英語でペーパーなんていうのは無理ですよ。だからアラバマ出身の黒人学生でヘンリー・トンブソンという友人が親身になって手伝ってくれて助けてくれました。感謝のスキヤキをつくって礼をしたり、いろいろ苦しいのをしのぎ

ましたけど。やつぱり半年ぐらいいちよつと大変ですよ。

釜田 そう言えばほくも思い出すけど、とにかく最初の年にアメリカン・スタディーズをとつた。そしたら二週間に一度新しいことをやるわけですね。パンフレット一冊あつて、二週間に一度ペーパー書かなくちゃいけない。少なくとも三ペーシ。これがまた大変だった。ほかのコースもあるんだしね、本当に。

土野 夏目漱石がノイローゼになつたと言われるけど、彼がペーパー書いたかどうか知らないけど(笑)。ペーパーも書かないで彼は何かノイローゼになつてますね。

### アメリカでは大学でメソッドを徹底的にたたき込まれる

釜田 山田さん、いかがですか。長く向こうへ行つてらっしゃつて。

山田 私の場合、ちよつと皆さんと違つてアメリカの大学院に行く前に、実は企業で働いた八年間があるんです。七八年に同志社大学を卒業してから八五年までバンク・オブ・アメリカにいたんです。

だからちよつと皆さんと経路が違う。それで実は子供が生まれてからだったわけですから三十歳過ぎてから、UCLAの教育学大学院に入ったんです。バンク・

オブ・アメリカにおりましたから、本当はビジネススクールのほうが合っているんじゃないかと思っただけですけど、やはり企業内研修とかそういうことをやりたかったので、UCLAの教育学大学院に行っただけですけど、そこは実は半分プロフェッショナルスクールで、半分アカデミック大学院なんです。私のおりましたところは、比較教育学、教育社会学プラス開発教育もそうなんですけど、アカデミック大学院もある。ただ先生方にしてもし先生さんにしても、一たん社会で経験してこれた方が非常に多かったです。ピースポードでいろんなところに行かれた方や、開発問題でインドネシアとに行かれた方が多かったです。だからある意味で大人の考え方の人も多かったですから、すぐに学生から大学院に来るというカルチャーが合わないようなところだったんです。それで私の場合は比較的ギヤップはなかったんですけど、ただ、ア

メリカの大学を経験してないわけですよ。いきなり大学院だったので、ペーパーの書き方とか困ったことは困ったんですけどね。

一つ非常にアメリカ的なブラグマティズムだなと思っただけ、メソッドという研究手法にしてもそうなんですけれども、勉強の仕方というものをマスターすれば、それなりにやっていけるといえるがわかったんです。そのためのコースというか、教え方というのが徹底してました。ある意味では、これはアメリカのよさか悪さかわからないんですけども、狭いなどという部分はあるんです。日本の大学院などで勉強されている方のほうが、ある意味ではものすごく古いところから勉強しているところもあるんじゃないかなというのを感じました。

ただ、これは私のいまでも研究の鉄則にしているんですけども。私はいまだ学研究、高等教育研究をしています。DfU取得後に二年間ほど、向こうの国際研究センターでポスト・ドクをしたんですけど、そのときずっと大学院生のときからお世話になりましたアドバイザーで、

ジョン・ホーキーンズという中国研究の先生に、人と違うところをやりなさいということと言われたわけなんです。いろんなパラダイムがあるけれども、そのパラダイムはパラダイムとして置いて、パイオニアとしてやっていくということを考えてとけということと言われたわけです。それ以来ずっと継続高等教育、プロフェッショナルスクール研究とか、あまりよそでやってない、ある意味でマイナーなんですけどね。

そういうやり方というのは、やっぱりアメリカというのは、そのときそのときの時流はあるんでしょうけれども、長期的な戦略とか、幅の広い研究をわりと認めていくという土壌があるんだなというのを感じたわけです。ところが、日本に帰ってきてからいろんな学会活動とかしたりしても、なかなかそういうところがない。また大学でもそういう感じがするんですけどね。

もう一つは、逆に日本の大学生は高校までは勉強しているわけですね、びつくりするぐらい。アメリカの学生はそれほど勉強してないわけです、入試がないで



### 山田 礼子氏

やまだれいこ／'56年神戸市生まれ。同志社大学卒業後、バンク・オブ・アメリカ勤務を経て'86年渡米。'88年UCLA教育学大学院入学、'89年修士課程、'91年博士課程修了、'93年同大学院で教育学博士号(Ph. D.)取得。'90年から全米教育大学院成績優秀者協会会員に選出される。国際研究センター学部長ホーキンス教授の研究助手などを務めた後、'94年PHP総合研究所入所。'96より現職。訳書に「フリードマン著「開かれた大学への戦略」(PHP)、著書に「2010年の高等教育戦略(仮題)」(同)近刊予定。

すから。それを四年間で、きちんとした手法さえあればあそこまでレベルをあげることができるわけですから、逆に日本でも高校までに終えるのでなしに、そこそ的大学できちっと厳しく教育していけばいいんじゃないかなアと想ったりしているわけです。

釜田 斎藤さん、どうですか。斎藤さんの最初の出会いのところをちよつと思いついていただけたら。

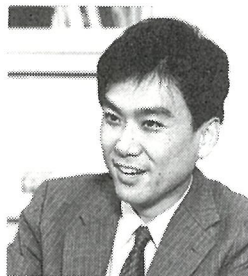
斎藤 最初から私もし大学院に行っていれば、かなり大学教育に関しての感覚は違っていたと思うのです。それはやはり金田さんがおっしゃったように、最初にいたアーモスト大学の二年間というのは、ほくの人生にとつてはそれ抜きではほとんど語ることができない部分なん

ですよ。その二年間で、要するに世の中でこんなに違う部分があるのだということをお願い切り経験させられた。逆に言うと、勉強の大変さという面では最初の二年間が圧倒的に大変だったために、はっきり言って、ほくに比べてイェール大学大学院の二年ってそんなに大変ではありませんでした。それは先ほど山田さんがおっしゃったように、ある程度手法を学んでしまつてその上につかると、プラクティカルにある程度対処できるんですね。そこに至るまでのロジックの組み方とか、どういうふうに分の意見を出すかということをやはり徹底的にアーモストでたたき込まれた。

いま話されていて思い出したけど、私もアーモストではアメリカ研究の専攻だ

つたんですけど、私がいたところのアメリカ・スタディーズの最初の入門の二つの科目というのは、ほかのアーモストの例えは政治学とか経済の科目よりも宿題が多いんです。クイズとペーパーの頻度は高かったです。短いんですけど、例えばペーパーのものを四回出すとかね。アメリカのセメスターのシステムで、例えば一学期が十六週間ぐらいあり、その中で四回ペーパーが出るというのは三週間に一回ぐらいあるのです。そうすると一つ出して、やっと終わったと思つていたらまたすぐに次のが来るんです。休んでいる暇がない。そういう意味ではペーパーの書き方などを本当に徹底的にたたき込まれた。





齋藤 文彦氏

さいとうふみひこ／'61年京都府生まれ。同志社大学卒業後、新島スカラーとして米国アーモスト大学に編入、卒業。'88年イェール大学大学院修士課程修了。同年、国連の専門機関の一つ「国連開発計画」(UNDP)に勤務、Bangladesh等で開発援助に携わり、'93年より勸国際開発センター研究員に。'96より現職。著書に「アメリカ留学のすすめ-自由な心を求めて」(明石書店)、「現場から考える国際援助-国際公務員のレポート」(日本評論社)等がある。

### 教師も学生も甘えている

齋藤 それとこの四月から日本の大学で教え始めているというところで、これも

私にとっては非常に大きなカルチャーショックをいま味わっておるわけですが、こういうと何か語弊があるかもしれないが、日本の大学の場合は、教員側も学生側お互いに甘えているという感じがすごくあるんですよ。偏差値の高い大学では必ずしもそうでないのかもしれないんですけども、例えばせっかく大学に授業に来ているのに、教師がけっこう関係のない話をして、おもしろくないことってけっこうあると思うんですけど、それでも学生は先生に向かって、「その

話、おもしろくないからもっとちゃんと授業せい」ということはあんまり言わないですよ。だからこれはけっこう楽だから、これはいいわということになってしまってます(笑)。

たぶんアメリカなんか、特にプロフェッショナルスクールに行くと思うんですけど、借金して行ってますから、「自分はこの二年間をそれこそ社会人を一回やめて借金をしてきているから、そんなくだらん話をしてもらったら困る」と言うわけですよ、学生のほうが。日本の社会の中で、特に大学ではそういうことあまり起こらないですね。また、制度的にもアメリカのことをモデルにして、例えばシラバスなんか最近はずいぶん出しているんですけど、やっぱり運用

の仕方が相当違うというのがすごくありますし、私も駆け出しでいろんなことに試行錯誤を繰り返しているわけですけど、自分も含めて、たぶん教員も学生も両方甘えているなアと。

### シラバスは 学生との契約である

金田 ぼくはそれね、非常に大切な問題だと思えますよ。というのは、日本の大学で例えばシラバスというものをアメリカにならってつくるけれども、私がカリフォルニア大学にいたときにつくったシラバスというのは、私は学生との契約だと思ってるわけなんです。こういう科目をこの範囲でこのレベルでやりますよ、そしてこのカレンダーでこう

いうトピックをやるんですよ、こういうリクワイアメントがあって、こういうふう成績をつけますよ。君たちはこういうリスボンシビリティがあるんだと。だからペーパー書かなくちゃいけない。お互いにここで学期の最初に契約するのだという気持ちでつくるわけですね。だから学生は初めからわかっているのだから、途中で何とかか何とか言いわけをしに来たら、もちろん病気になるんだとか、家族のエマージェンシーがあったといえ、これは別だけれども、話にならないわけですね。この日に試験をしたらちゃんと初めから決まっているんだから、試験が重なるから何とかしてくれとか、そんな言いわけはできないわけですね。だから先生のほうもやると言ったことはやらなくちゃいけない。

ところが、日本では先生が自分の教えることについて、また授業というものだけをとつても、どういうふうになれに申し開きをするのだ、どういう責任のとり方をするのだ。というの、例えばアメリカでは、ぼくは人事委員会にもおつたからよく知っているんですけど、教授

になっても三年に一度審査があるわけですよ。その中の一つがティーチングなんです。リサーチとティーチングとプロフェッショナルサービス。このティーチングのエバリュエーションのときに必ず学生のエバリュエーションが非常に大きなウエートをもつわけですよ。だから学生が五段階にわたって、二十項目にわたって先生を採点するわけです。

それも、これを先生がするわけじゃない、学生自治会がする。学生自治会が集計して、自分たちがパンフレットを一年に一回出す。そういうのが三年に三冊あるわけ。十二科目の集計が出るわけです。

そうしたら結局自分の教えることについても学生がどれだけわかったか、学生にフェアであったかどうか、そういうことについても一々気にしてなくちゃいけないわけです。だけど、日本の制度ではそういうことは全然関係ないわけやね。教えっぱなしと言えば悪いけど、要するに一方通行でやっとして、それで何ともないわけやね。学生も文句言わない、斉藤さんが指摘したように。そしてまた自分もだれに申し開きをしなくちゃいけない

ということとは全然ないわけ。だから甘いですよね、なれ合いと言えなれ合いだし。

齋藤 私の友人が広島大学の大学で教えているんですが、先日電話でちょっと話をした。私が、「大学って恐ろしいところですよ。私エ」と言っただけですよ。「おまえ、それ盗聴されていたらどうするね」(笑)と言われましたけど。恐ろしいところですよねというのはいさかいの意味で、非常に良心的にやろうと思うと限りなくできると思うんですけど、逆に思い切り怠慢にやろうと思うと、どこからも文句を言われないという言い過ぎかもしれませんけど、文句をなかなか言われないという面があるために、そういう意味で、通常の企業の論理、グループの論理というか、組織の理念が働かない。学部長といつても、会社などでのスーパーバイザーではないですよ。

### 日本の学生は「ムダ」なことはいらない

山田 私はそれとまた学生の気質が違うなというのをすごく感じるんですよ。

アメリカにいましたときに、ちよつとの間大学院生と、それからスタディアブロード・プログラムってあるのですが、そこで学生を教えたことがあるんです。そうすると、アメリカの学生って、大学院生も含めて、ある意味で言うところと非常に要領悪いんですよ。でもすごくヒュアと言

ったらおかしいんですけども、こちらが言ったことに対して、一生懸命学ぼうという気はあるんですね、役に立たなかつたとしても。それが日本の学生をいまして、去年も非常勤でずっと教えていたんですけど、「先生、こんなことして一体何になるの」という反応が返ってくるのです。つまり非常に合理的といいますが、ある意味で賢すぎるところがありますから、役に立たないのだったら棄てようという、ものすごく合理的な感じを日本の学生から受けるのです。

ですから例えば宿題とか出したとしても、要領よくこなしてくるわけです。それは日本の学生の場合、本当に要領がいなという感じがするんです。アメリカの学生だったら、何でこんなにむだをするのかなというぐらいしてくるんですけど

れども、それは本当に自分の気持ちでやろうという感じがします。そこがずいぶん違う。やっぱり日本のそれまで受けてきた教育のなかで、またそれもあんまりつなげたくないんですけども、偏差値と関連して要領のよさがすごく身につけているなアという感じがする。

釜田 いま日本とアメリカの違いというのが出てきたんですけど、海外からも日本の教育制度の中でいちばん評価が低いのは大学ですよ。高等学校までの評価とがらつと変わるんですね。そこは前々から大学にとつてはいちばん気になる点なんですけど、何がそうなのか。そういう違いというのはどこから出てくるんですかね。

金田 例えばまず教師の態度が違うね。もつと言えば教員だけじゃないですよ。大学というところはいわゆる職員もおれば、教員もおれば、校友もおれば学生もいるというところですね。そういうところで理事会なら理事会というものがあって、これが最高意思決定機関であつて、というような調子で、ちゃんと機構ができています。

ところが、日本では例えばだれが—— ぼくは同志社の、それもまだ新しいからよくわからないんだけど、だれが、だれに対して責任を持つているのかということが非常にいいままな機構なんですよ、大学というところは。そして教授は学生に責任持つのか、理事会は教授と職員に対して責任持つのか、総長はだれに、学長はだれに、こういうことがどうもわけがわからない。だれがしたら首切れるのかという問題もありますね。例えばアメリカでは非常に深刻な問題で、いわゆるアシスタント・プロフェッサーからアソシエイト・プロフェッサーになるときに、テニユアができるわけですけど、だから一応インデフィニットなエンプロイメントの保障がある。そのときにそれはもう大半の人が通らないわけですね。そういう厳しい審査があつて、そしてまたそれを通つても、アソシエイトになつてからも三年に一度、フルになつても三年に一度、そしてその審査がうまくいかなければ、さっきの三つの分野で一つでも欠けると、号俸が上げられないわけですよ。年齢給じゃないから。



釜田 泰介氏

かまたたいすけ／41年中国・旅順市生まれ。'67年同志社大学法学研究科修了。'49年より法学部教授。法学部長、大学評議員、国際センター所長、アメリカ研究科長などを歴任。現在はアメリカ研究科長、アメリカ研究所長。専門は憲法。

そして最近のカリフォルニア大学の例で言えば、三回それで飛ばされると、もう教授職をやめなくちゃいけない。レクチャラーになってくださいと。要するに普通のケースはそうなんです。いわゆる学会での仕事とかそういうことができなくなる。したら、あなたは教えるのはまだ大丈夫ですから教えてください。教えるのは、プロフェソリアルの仕事としてより、レクチャラーとしての仕事なんだと。プロフェッサーというものはこの三つがそろっていないとダメなんだと。だから緊張感が違うんですね。

釜田 この話ほもつとあとから出てくると思ったんだけど(笑)。というのはほくが日本の学生のことについて非常な危機感を抱くようになったのは、やはり自分が国際機関、斎藤さんは国連の開発機構におられたけど、ほくは国連関係、世界銀行、それから財団関係のいろんなことをやっただけですけど、そういうところで会う若い連中というのは、要するに私ならものもの言い方をすれば、ある国なら国、ある部門、ある地域、何でもいんでですけど、そこへ行って現状の分析ができて、医者言葉で言えば診断ができる。どこが悪いか。どこに手を入れなくちゃならないか。それに対して対応策を立て

感じですか。世界のほかと比較されましてどうですか。

釜田 この話ほもつとあとから出てくると思ったんだけど(笑)。というのはほくが日本の学生のことについて非常な危機感を抱くようになったのは、やはり自分が国際機関、斎藤さんは国連の開発機構におられたけど、ほくは国連関係、世界銀行、それから財団関係のいろんなことをやっただけですけど、そういうところで会う若い連中というのは、要するに私ならものもの言い方をすれば、ある国なら国、ある部門、ある地域、何でもいんでですけど、そこへ行って現状の分析ができて、医者言葉で言えば診断ができる。どこが悪いか。どこに手を入れなくちゃならないか。それに対して対応策を立て

考える、あの人はああ考える。そして自分の考えとあの人の考え方を比べてみて、どっちを自分はとるか。その人の立場に移るか、それとも自分が相手をこっちへ引つ張るか、こういうふうな経験がないわけですね。

そしてたら大学へ来たなら、こういうことがそのまますぐできるかという問題が出てくるわけですね。私がアメリカで教えた連中で三、四人、短いのも入れたらさらに四、五人、世銀へ働きに行ったんだけれども、そういう連中と、ほくが日本で知った学部 of 学生とか大学院の学生とかと比べると、どうもあいつらと競争できるのかなと思うわけですね。ひとりで仕事をしなくちゃいけないことがたくさんあるわけでしょう、世界的に仕事をしようと思ったら。みんな違うところから来ている連中が多いわけです。その連中と仕事をして自分の意見を通して、向こうの意見も聞いて、そしてどちらを選ぶかということになって、対応策なんかを立てるときに特にそうなんです。なるべく最大公約数的なものを見つけていかなくちやいけない。そういうものをつく

り出す、そういう努力というか、プロセスに日本人はなれてないわけです。だからこれは英語の問題というより、ほくに言わせたら結局育て方の問題というか、学校教育そのものの自体の問題。

### 日本の大学も、

### 国のシステムと同じように

### 金属疲労しているのではない

土野 ほくは大学で教えたこともないし、大学の実情がどういうふうになっているかというのは外からいろいろなお話し聞く程度なんですけど、やっぱり日本全体のシステムが金属疲労化していて、ビジネスは任専から大和銀行、住友商事に代表されるように、非常におかしくなっている。政治家のスキヤンダルは年中行事だが、官僚は大丈夫だと言われておつたのが大蔵省のああいう不祥事でしょう。今度出てきたのはTBSのビデオ問題、メディアもやっぱり緊張感ないし、儲ければいい、おもしろければいいと馬脚をあらわした。教育も同じようにおかしいでしょう。明らかに日本の大学というのは、総合点で言うとう世界の百位までに一つも入っていないという調査もある。

そういう状況ですよ。

さつき金田先輩がおっしゃったこと、それから山田さんが教えていらつしやつて、「これは何に役に立つのだ」と、これは非常にももしろい質問だと思うんですよ。すべてがハウトゥ形式になつちやつていて、例えば就職の術というのがありまして、「あなたの尊敬する人はだれですか」という質問の答えの模範解答までがハウトゥのものの中に載っているわけです。ほくはいちばん大事なのは自分で考えるということ、基本にする教育がないということだと思っんです。ペンディングマシンみたいに百十円入れたらコーヒーが出てくるというような、一つだけしか答えがない。

息子はいま十九なんですけど、四年前にこういう事件がありました。インターナショナルスクールに行つてたんです。英語の先生から、自分がいちばん感動した体験を書けと言われたらしいんですよ。ちょうどその夏家族でイタリア旅行していて、ローマのカラカラ浴場の近くの場末の店でコココーラを飲んだが、その時の夕日が非常にきれいだったとい

う話を息子は書いたわけです。アメリカ人の先生がそれに、言わばケチつけたわけです。そしたら息子はそのころ十五五だっただけで、頑としてこれでいいんだということ、先生と三十分ぐらいい話し合いをしたわけです。両者も別れです。よくも息子の作文は詩的でいいと思っていました、これは親バカ要素もあります。ところがその次の段階というのは、本人が書き直しを拒否したわけ。この先生は「それはいい、もう一つ書け」ということになりました、もう一つ書いた作文のタイトルは、「なぜ先生にケチをつけられたことで自分は怒ったか」というのを息子は書きました(笑)。

金田・釜田 偉い(笑)。

土野 そういう何というか、自分の意思を通すことはできるし、それを許容する学校も教師も、心は広いし、本人もそれをやっても悪くはないと思っている。これはいいですね。それにやっぱり自分で考えるというのか、知的なことというのは、そう簡単に妥協すべきではないと思っ

て教育というのはまず質問だと思うんで

すよね。ライト・クエスチョンズとか、ジャーナリズムと同じです。いまはやっぱりそういう意味では、出版界も放送界も非常に緊張感のないことになってきて、みんなあまりおもしろいと思っ

### 子供にセルフエスティームを教えること

山田 そういう意味では私も同じだと思っ

言葉で言えば自分を非常に大切にすることで、アメリカでもヨーロッパでも育て方の基本なんです。子供にそういうものを教えていることで、そのライト・クエスチョンズ、何を考えていくかということ、これはやっぱり日本に帰ってきて思いましたのは、高校までにまったくそれを育てないということです。

ですから、やはり斎藤さんなんか同志社でずっと育ててきていらっしゃるから、私学ではそれがわりにできますよね。ですから大学に入ったときにアーティキュレーションという、まあ教育学で言うんですけれども、私学出身の方というのは一貫教育だから、大学に入ったとき特にソーシャル・サイエンス畑ではあまり違和感がないと思うんです。ただし、これが普通の受験ですと来た学生にとっては、特にソーシャル・サイエンス畑に入ったときに、論文にしても何が問題かという質問ができないようなことできていると思うんですね。それが日本の公教育の実情ではないかと思うんです。

ですから、特にその問題として日本の

高校生までの学力がすごく高いというところが言われすぎましたので、逆にある意味で学校教育というところが自信を持ちすぎているわけですよ。ただよく考えてみますと、本来の学問というのはそういうものじゃないですし、特にソーシャル・サイエンス畑が世界でも通用しないところだと思っただけ、コアになる部分をしていない。だからいままさに生涯学習時代とか言われてまして、総合学習というのを入れていこうって言いませ

すけど、受験にはこれ関係ないからどうしても進学校など捨てていくわけですよ。そうするとやはり育たない。やはり大学だけでなしに、下からも考えていかなきゃなりませんね。

**斎藤** さつき山田さんがおっしゃっていたこと、非常に興味深く思ったのは、要領がいいか悪いかということなんですけど、土野さんなんかにむしろお伺いしたのは、社会人になって要領いいか悪いかというのは、学校の試験の模範解答を得るのに要領いいか悪いかと、たぶん全然違うものだと思うんですよ。だからアメリカの大学は、ある意味では非常に

むだをしているかもしれない。しかしそのむだが、たぶんあとですごく役に立つと思うんですよ。その辺、例えば実際仕事をされていて、ある意味で要領いいのかもしれないけど、本当は使いたいものにならないとか、そういうのを思われたことあるかもしれないし(笑)。

**土野** どうですかね。要領のいい人間はやっぱり会社でもある程度までは出世しますが、トップにはなれないでしょう。斎藤さんのいうムダをしていない人は、自分で新しい状況をつくりだすことができな。それより、会社人生をやっている嫌になるのは、責任のあいまいさですね。あいまいというのは日本文化の本来にコアのところにあるものだと思うんですよ。だれがどういうふうな責任を持つかというのは、はっきりしないとダメですね。厚生省のHIVスキャンダルの過程を見ていたら本当によくわかりますけれども、要するに個人の責任はあまり問われないでしょう、日本では。昔からそうなんですけどね。だから太平洋戦争のときなんかでも、めちゃくちゃな作戦を立てた参謀なんていうのは、その責任

もとらされずに、しばらく鳴りを潜めて、またすぐ出世しますよ。この風土病をどうするかという問題はありますね。

**金田** そう言えば、またもう一つ日本の大学とアメリカの大学と違うのは、日本の大学の教授というのは、ゼミの学生の就職に対してものすごく世話をやくわけでしょう。

ところが、アメリカの教授というのはそういう責任は全然ないわけです。責任感もない。そういうことについては就職というの、これはもう個人の問題なんです。もちろんいわゆる推薦状は書いてありますよ、もちろん推薦状というのも、日本とアメリカとまたものすごく違うんだけれども。

また、アメリカの大学は、例えばいわゆるプロフェッショナルスクールとアカデミックなグラデュエイトスクールとは全然違う。プロフェッショナルスクールでは、例えばローヤーになるんだったらロースクールに行く、ロースクールに行つて学者になるやつはやっぱりPh.D.をやるんだと、そしてローヤーになるのはJDをもらうんだ、JDもらったら今度

はバーのエグザムを通らないといけないというように完全にプロフェッショナルリズムでやるわけですね。日本の法学部というのはその辺がまたあいまいで、いいところもわからんけれど。

ところが、あいまいさも、例えば日本人はこのあいまいさが日本人には特別な感性があつて、お互いにわかり合っているんだと、こういう仮定があるわけですよ。例えば腹芸であるとか、以心伝心であるとかね。しかし本当にコミュニケーションしているのかどうかということになってくるとまた話は別で、例えば外国人には日本人独特の感性がない、あいつらは鈍感なんだからというようなことを日本人は平気で言うわけです。ほくは本当にそうかなアと、よく思つただけどね。本当におれたち日本人としてわかり合っているんだらうか、どうもあいまいなままで何とかかんとかやってきて、それで問題がなかった時代もあったが、いまになってワァーと噴き上げてくる。そして、もちろん日本の企業が世界じゅうで仕事をしようになつたから、ああいう住商の事件とか大和とかいろいろんな事件が出て

くるわけだけど、日本の大学だつて本当に国際的な競争にさらされるといふか、国際的に存在意義を出さなくちゃならなくなつたときに、これはどうなるかという問題、ほくは絶対あると思うね。さっき土野さんが言っていたように、日本でいちばんいい大学でも研究面とかそういうことで、ドーンと下のほうになつちゃう。特に社会科学なんか。

齋藤 だから大学の国際競争力なんていうものを数字で例えばあらわせるようなものがあつたとしたら、日本は恐らく、何か見るのも恥ずかしいという感じになるのじゃないですかね。

山田 そうですね、だからたとえばアメリカにいらつしゃつていられるアジアからの留学生の方が本国に帰られますよね。そうすると、アメリカでの手法というのをけつこう帰られたところで広がっていくというか、大学自体が取り入れていくわけです。日本の場合、なかなかそれがしにくいというか、日本の中で日本文化の中に入つてしまつと、その手法を取り入れて改革しようと思つてもできない。やはり私、視点が世界の中にないのかなと、

視点が世界を見てないのかなという感じがするんですよ。韓国の先生方がいつもおっしゃるんですけど、いま「地球化」という言葉を使つていらつしやるんですよ。だから「地球規模で競争しよう」というのがスローガンとしてあるぐらいで、日本は国際化つて言いますけど、実際はその視点は本当に国際的に見てないんじゃないかなという感じもするんですよ。

齋藤 それはやつぱりよくも悪くも偏差値の悪影響があるからじゃないんですかね。日本の他の大学との競争は意識にあるかもしれないけど、例えば同社社なら同社社が、国際的なレベルでいうと、ここぐらいの水準にはなりたいたいか、そうなるためには例えばこの五年間使つてこういうステップでもつてそこへ行こうというふうなプランというのですか、そういうものがあるのかどうなのか、たぶんあるところは非常に少ないと思うんですよ。



## 一貫教育の 利点を生かしているか

釜田 そうですね、いいお話ですね。

ちょうど日本の違いというものがだいぶ浮き彫りになってきましたので、ここで後半のもう一つの問題に移りたいと思います。我が同志社に対して、卒業生の方としてご感想がいろいろ外から見ただいてご感想がおりだと思っております。だからやっぱり同志社の問題はどこなのか、それから将来に向けて、幸い同志社は中学、高校があるわけですね。一貫教育という言葉も古くから使われているわけです。ですからここでやろうと思えば、さっきからの中高教育と大学の関係ですね、新しいことをできるんですね。ですからその点について、忌憚のないご意見をお願いします。

土野 平和平和と言って、平和が来ないのと同じで、国際、国際と言って国際化はしないと思うんですね。わが同志社には、アーモスト館とかハワイ寮だとか、カールトンハウスだとかいろいろありまして、まずカールトンハウスはもう

なくなつたですよ。それからハワイ寮というのがあります。この前、梨木神社のところを通つてましたら空き家になつて何も使われてない。アーモスト館もありますけれども、単なる寮になつています。ほくらの学生の頃はアーモスト館は本当の意味での共同体でした。アーモスト大学のフェローと一緒に三島由起夫を読んだり、土曜日の早朝は野球をやつたり楽しかったな。外に向かつても開かれていた。あのホールで当時の社会党の委員長鈴木茂三郎から「なんでも見てやろう」の小田実まで呼んでアッセンブリーアワーをやつてました。現寮生の責任というよりも、むしろ同志社がやっぱりどういふふうにああいう施設を利用してほしいかということの理念というのが必要でしょう。大学の責任者がこれらの施設を使って、同志社教育のために、国際主義のためにどう使うかという方針があると思うんですね。そういう意味では、国際というのがスローガンだけになつてしまつていのではないか。

それと同志社へ新入生が入つてきて、やつぱりまだまだ英語なんていうのはあ

んまり実戦的ではない。これを徹底的に鍛える。国際時代の同志社は英語をしゃべり、読む力を学生のためにシステムティックに教えることをやるべきだと思えます。慶応の藤沢キャンパス方式も参考になるでしょう。情報化社会に対応した施設を完備して英語とコンピュータを一年間集中的にみっちりやつてしまおうか。

釜田 そのためにはセメスターにするとか、工夫する必要があるけれども、ほくはできないことはないと思います。それは大学の決断なんです。

斎藤 施設の点でやつぱり、私、自分が行っている大学もそうなんですけれども、要するにアメリカであれば、二十四時間学生がアクセスできるコンピュータのターミナルというのが、一人一台にほとんど近い状態であるんですね。一人一台が無理であっても一・五人に一台ぐらいに、ほとんどなつていっているんです。ところが、それを日本の大学でできているところというのは、べつに同志社であろうと私がたまたま行っている大学であろうと、たぶんそこまでの頻度で普

及しているところはほとんどないんじゃないか。それは私自身は非常に大きい問題だと思うんです。好むと好まざるとにかかわらずインターネットというものが現実存在して、それが就職にも大きい影響を及ぼしてくる。実際それでベンチャーの会社の活動を学生時代からしようとしている、そういう人がいるという時代に、学生にとってアクセスできるターミナルがほとんどないということは、いいのかなのか。これは国際競争力という話が先ほどありましたけど、もし卒業生がほかの国の大学を卒業した人間と同じようにやり合えるという、そういうことを想定するのであれば、明らかに大きい不都合だと思っんですよ。

**金田** これもやっぱり小学校のときからなんですよね、言ってみれば。私の娘なんて小学校の二年生のときだったかな、それぐらいから学校でコンピュータで遊ぶようになってね。学校の教室に五台ぐらい置いてあるわけですね、二十八人ぐらいのクラスに。それで遊ぶようになって、いまはアメリカからEメールで二日に一回ぐらい私のところへ送ってくるの

だけだね。だから例えば新しいコンピュータを買うと、私がマニュアルを見て、もたもたしているのに娘はパーとキーを動かしてつないじやうとか、そういうなれの問題もあるからね。これは大学へ来てからやって、アメリカ人と同じようにできるかというのは、やっぱりこれはなかなか難しいと思っんです。

いずれにしても、ぼくは日本の大学で、例えば同社でいちばんやってほしいことがある。さつき釜田さんが言っていたように、同社は中学校から高等学校、大学まであるのだから、純粹培養の齋藤さんのような人を育てること。要するに知的な論理の組み立て方ができる教育をしてもらいたい。もちろん聖書の教育も大切だろうけど、自分で質問が出せて、そして考えて、その答えの立場について自分で責任持てる、自分に納得させる論理をまず自分に言い聞かせる、そしてそれを今度は他人に伝えることができる。とにかく現状とか、それからまた悪いところ、欠点、そういうものに対して対応策が立てられる、こういう訓練、これをどうするかという問題なんです。やっ

ぱり大切なのは対話という教育方式だと思っんですよ。いわゆる一方教育じゃないにね。先生が言うことを聞いていて、それを覚えて、そんなことばかりやっておつたんでは、結局本場に外へ自分を出すようなことはできないと思っし、そして相手との対話ができるようになったら、例えば国際機関で働くにしろ、国際的な場で働くにしろ、少しぐらい英語が下手であろうと何であろうと、言うことさえしつかりしておれば、みんな聞いてくれるんですよ、本当に。

さつき基礎演習の話が出たけど、私、同社の経済学部の客員教授で来たときに、「ボランティアでやるから田辺へ行かせてくれ、田辺で新入生のセミナーをやりたい」と言っただけですよ。というのは、ぼくはカリフォルニア大学で教務主任のときに、とにかくフル・プロフェッサーの連中が「一年生を教えな」というのはどうもいかん。みんな一年生を教えるべきだ。そのためにフレッシュマンセミナーというものをやらな」と。だからここへ来て去年それをやっただけです。

学生の反応を探るのだけど、全然反応しないね、教室では。そしたらぼくの言ったことについてあなたたちが考えたこと、またぼくの言ったことがおかしいと思っただけについて書いてきてくれと。

そしたら次の日、書いてくるのね。それをぼくが読んで、それに反応する、これはキャッチボール。一週間に一度投げ合っているみたいなんです。こんなものではどうも能率が上がらん。結局それで終わっちゃったんだけどね。とにかく基礎演習といたって、四十人ぐらいおったかな、とにかくアームスト式に十二、三人で先生と話しすると違うわけね。こういう雰囲気はどこでできるかなあ、先生と生徒が同じアイレベルでコーヒー飲みながら、ビール飲みながら話す。それで先生、先生と言っじゃなしに、何々さん式の調子でね。学生に先生が売り物にすべき、いわゆる知的な作業というものがどういうふうに伝わっていくか、そういうものはこういうものなんだと学生が感じられるような場というものがどこでできるかと。それはもう大教室でできないことはよくわかったでしょうね。そ

したら小さいセミナー式の部屋をつくって、そこでできるのか。日本の大学では結局ゼミしかないわけね。このゼミ生がまたやっぱり相当たくさんあって、ぼくらのときは、特にゼミに入るのは、そのゼミの就職がどうだったかということでも入ることが多いからね、結局。知的なものよりも、結局いわゆる同僚としてというか、仲間として入るところがどこかとか、そんなことのほうが重いわけでしょう、要するに。だから、いわゆる教師と生徒とが一对一になれるようなときがいつできるんだという問題ですね。大学でも小学校でもそうだろうと思うんだけど。

**土野** 特に語学なんかということになると、毎日やらないとだめですよ。中国語でもフランス語でも。

**釜田** 前々から思うんですが、日本の大学はそうしますと、科目数が多すぎますか？

**金田** ぼくの見方は、それはとにかく一年の間ずっと続けて一週間に一度だけやる授業というのは、ペダゴジカルに考えて本当に効果的なものなのかということをも本当に検討してみる必要があると思いますよ。こんなことやっているのは世界的にはあんまりないと思うんですよ。

**山田** 語学に九十分という時間も、うちの大学でも問題になっているんですけど、適切かどうかという問題。例えば単位で計算していくと、どうしても九十分になるんですけど、筑波など七十五分です。それでたしか三単位の計算でいけるんですね。このあたりもちょっとこれから考えていく必要があるのではないのでしょうか。語学の問題と絡めて。

**金田** これはどんな科目でもだと思っただけですよ。例えば九つの科目を一年間やるとか、まあ七つでも、八つでもいいけれども、こんなたくさんコースをいっつもやっているわけにいかんわけです。だからアメリカなら例えば四つのコースを一つの学期にやるわけね。そのかわり、その間はそういう四つのコースに、いわゆるコンセントレートしちゃうわけね。だからさっきの話でも出たように、一つ一つのコースについて試験が何べんもあってペーパー書かないかん。ところが、九つ持っていてごらん下さい。そんなこ

どね。

### 日本の中だけで大学を 考えていてはいけない

釜田 さきほどから、日本の大学に国際競争をやらせたら大したことは出来ないということですが、同志社を国際的に勝負できる大学にするにはどうしたらいいのかということですね。

斎藤 ですからそういう発想をまずすることが大事だと思いますね。それは例えばJリーグで本場にフリーで、バイヤスなしでやったら、日本人のプレーヤーが十一人の中に何人入れるかということと同じなんです。だから、いいチームをつくろうと思ったら、全部外国人のプレーヤーになってしまふのであれば、日本人はやっぱり下手だと言われても仕方がないわけですね。だからそれと同じで、同じ土俵で勝負したら、うちの大学はそこに入れるかどうか。そこに入るためには、やはり入るために努力をしていかなといけませんよ。だからそういう発想で大学というか、同志社の場合は中・高ともありますから、全体と

と物理的にもできない、本当の話。だから結局コースを減らして、そして密度を高めるという。密度を高めるために、学生のためにも教授のためにも、いわゆるコンタクトの時間をもう少し上げないかね、一週間のうちに。ほくは一週間に二回会う九十分のクラスがあるけど、九十分二回というよりも、それはやっぱり六十分を三回にしたほうがずっといいのだけどね、本当は。カリフォルニア大学は五十分が三回で三単位ね。週三回で三単位、大体四回あれば四単位。そして五回あれば、例えば入門コースなんていうのは五回あるんですけど、教授は五回教えないですよ、TAが二回教える。それで五単位。だから日本の大学で九科目登録して、例えば試験のとき、本当に何の勉強ができるんだと。試験のときしか勉強しないんだけれども。だからぼくはよく思うのだけど、学年、通年というこのコースの組み方というのは、いつ、だれのために、どういう理由でできたことかと思っんです。本当に学生のことを思ったら、また教育的効果ということから言えば、こんなおかしい制度はないと思うけ

してもっと考えていったほうがいいんじゃないかなと思うんですよ。

山田 あと、留学生の問題で、アジアからの留学生はどのような比率でしょうか。つまり私、アメリカにおりましたときにすごいなと思ったのは、戦略的な留学生受け入れをしていることでした。つまりアメリカに日本の留学生をたくさん受け入れてますね、東南アジアからも。その方たちが育っていったときに共同研究ということでどんどん輪が広がっていくわけです。確かに私も日本人留学生が日本に帰ってきて、私のアドバザイなどからは、共同研究とかどんどんできます。それがフアンディングにもつながり、UCLAの国際研究水準はどんどん上がっているわけなんですけれども。それから見ると、アジアというのがいま非常に伸びているわけです。アジアの留学生を戦略的にどんどん育てる、特に大学院なんかですよ。その方たちが帰ったときに、日本、同志社なら同志社の基盤というのが強くなる。お互いに共同研究なんてできますし、アジアの視点を入れることが将来にもつながると思う

\* Teaching Assistant

一般的には大学院の学生が、担当教授を助けて学部学生の教育補助を行う。本学では現在372人のTAがいる。

のですが。

**釜田** いまの同志社でいちばん伸び悩んでいるのは奨学金制度が大したことないということですね。このごろは留學生向けに、海外にも行っているいろいろ同志社のアピールしているんですけど、質問はやっぱり奨学金があるかということですね。ほとんどないんですよね。そして前から自分でいうことになりまして、それから奨学金ということになりますと、やっぱりそういう方はアメリカへ流れるということみたいですね。

**土野** 同志社とアメリカの十五大学でやっているAKP<sup>\*</sup>、そのプロジェクトで来られている一年で五十人ぐらいの皆さんは、それこそアーゼイハッピーですか。

**金田** ゼイワーハッピー。ぼくね、春の学期に頼まれて教えたんですよ。非常に楽しかった。というのは、同志社で一年半いて、それで全然反応のない教育しとったわけよ。そしてアメリカ人の三年生、これ教えてくれているというて頼まれて教えたんです。そしたらやっぱりアメリカ人だからわかんことはわかんと言っている、なぜそうなるのかというて聞きよるの

ね。そうすると、こつちが一ぺんにうれしくなっちゃうわけよ。そういうことにはくはアメリカで三十年間なれてきたんだから。それがよかったですね。そしてら連中がまたものすごくほくを買ってくれたしね。最後のお別れのときに、ほかに先生が七、八人いたんだけど、ほくだけに贈り物をくれるしね。だからよけいに楽しかったんだけど、本当に連中はハッピーだったと思いますよ、同志社での経験。だからそのうちの二人がまた日本へ帰ってくるかもわからん、そしてら同志社の大学院がどうなっているか。だからアメリカ研究科で日本のこともできるかというんですね。

**土野** 地理的にも京都なんというのは本当に恵まれたとこですからね。過去二十年間で八百人ぐらいいらつしやつてるんですよ、AKPの留學生。広報課にお願いしたいのは、これはやっぱり大変な仕事をやってきたわけだから、何か世間に知らせるようなこともやっていただきたいと思えます。それといろんな外国の大学との提携関係あるわけですよ。それはもう少し育てるといいうのか、徹底的

に利用して天下に知らせることもできるでしょう。

ひとつ提案させていただきます。同志社に明治維新研究所をつくる構想です。今出川のキャンパスは薩摩藩の跡だし、御所は目の前、明治天皇の生誕の地もすぐそこですよ。明治維新というのはアメリカ革命、フランス革命、ロシア革命、中国革命に匹敵する大文化革命だと思のですが、世界的にまだ認知されていない。この時代をやる外国の研究者が京都に腰を落ちつけて勉強する拠点を同志社につくるわけです。「世界史のなかの明治維新」という広がりのあるテーマで、一流の学者を客員教授と呼ぶ一方で、外国人の若手を育てる。最近の日本の学生は歴史音痴になつているので、この研究所の講師に授業をお願いする。明治維新というのは知れば知るほど面白いし、日本人にとっては誇るべき歴史的体験だと思いますよ。オーディオ・ビジュアルの図書館もつくれば、面白いと思えます。**齋藤** やっぱりインベストメントについて、先ほどおっしゃった奨学金がないかどうかという問題ですが、私が行って

\* Associated Kyoto Program

同志社大学とアメリカの15大学で作っている日本研究のプログラム。毎年9月にこれらの大学から50人の留學生が同志社にやってきて、1年間日本研究にとり組む。15大学はいずれもリベラル・アーツとしては全米ベスト20

るところでも留学生を招いて大学側がやっぱり全部奨学金を出しているんです。要するに発展途上国から留学生を呼ぶためには、大学が四年間保障するということがない限りビザを発給しないということとで四年出している。出さなければ、要するに留学生は来ないので出すことになったんですけど、逆に言うと、それだけ大学としては金を投資する。投資するけれども、例えばそれによって外国から来る留学生から日本人の学生が知的な刺激を受けるということとペイするかどうかわかるかと、そういうふうな考え方も一つできると。

**金田** そういう、連中が本当の教育を受けられるかどうかという問題があるでしょうね。というのは、中国人が言うのは、やはりアメリカのいい学校へいちばん行きたい。だからどうしてもセカンドチョイスになっちゃうのね、日本は。というのは、やはり実績があるわけですよ、アメリカの大学を出た連中はこういう勉強をして、さあPh.D.とって帰ってきたらどうなつてと。日本はそういう実績もある人もいるけど、やはり少ないからね。

だからその中国人に「よし奨学金やるぞ。来い。ここでやったらアメリカでやると同じだけの教育が受けられるぞ」と言えるかどうかの問題、ほくほく思う。というのは、やはりそう言う以上は、お金をやるから来いというだけの問題じゃないわけよね。やっぱりそれだけ責任持たないかんと思うわけですよ。

**斎藤** それは先ほどのほかの大学と国際的にどうこうという場合にもつながると思うんですけど、留学生を受け入れて、うちで勉強したなら、あなたはほかでは得られないこういうことが得られるんだという、それが何か。その売りが何か。

それが結局うちはアメリカの二、三流ですよとしか言えないだけであつたらね。

**金田** それだつたらだめなんです。

**斎藤** 例えばある先生が言っていたことで、私の勤めている大学は仏教系の大学であるということをむしろ積極的に活用すべきで、例えば仏教から見た経済学というようなものを教えるとか、それはここでしかやってませんよと。これは例です。内容のユニークさは何でもいいわけですよ。そういう「これはアメリカ

ではやってませんよ、ここでしかやってませんよと言えるようなもの」を何か育てていくというんですか、それがあれば、本当はアメリカに行きたかつたんだけど、でもやっぱりこれおもしろそうやと思う学生が出てくる可能性はあると思うんですよ。

**山田** うちの大学も中国、台湾の留学生が多いんですね。かわいそうだなと思つたのは、少人数教育というのをうたっているのはいいんですけど、日本人の学生は私語がすごいわけです。そうすると、日本の学生文化に触れて、中国系の学生や台湾系の学生は非常にショックを受けてしまふんです、いまおっしゃったように。だから一体何を受けて帰つたかなという、それこそアウトプットの面でちょっといまから考えていかなきゃいけないなというのは確かにあるんですね。

### 同志社の中・高を うまく生かすべき

**斎藤** やっぱり同志社の場合には中学、高校があることを、そういう意味ではうまく利用すると言つたら言い方が悪いです

けど、それをちゃんと見直す。先ほど金田さんがおっしゃっていた話を聞いて昔のことを思い出したんですけど、中高のときに、例えば「こっちが質問しますよね。そうすると、中学の先生、高校の先生の

中に、「そういうふう考えたことはなかった」とか、「それ考えてみたけど、おれもわからなかった」、そういうふうに答える先生がいたんですよ。そういうことは大変重要で、生徒にとってみれば先生から、「私が言っていることが正しいのだから、あなたはそれを信じなさい」という意味での権威主義的にガバツと抑え込まれるよりも、「それはほくも昔考えたけど、わからなかった。だからあんた、いいところを突いている」と言われるほうがいいかもしれないわけですよ。

**金田** 一貫教育のいいことは、いわゆる試験とかそういうもの、特に入学試験を気にしなくてもいいということなんだから、それが要らないだけに、もう少しいわゆる本当らしい教育ができるように使えればいいわけよね。ところが、私が最近聞いた話では、同志社高等学校でよくできる連中がほかの大学へ行くとき、

れをとめるわけにいかんけど、結局ずつと育ってきた連中が同志社へ来てても、ああ、自分がやりたいことができるというようなところが大学にもやっぱりなかったらいかんわけだからね。

**土野** いま同志社大学は学生数は二万ですか。だから二万の学生さんに何か目玉を一人一人全部つくるっていうことはできないから、幾つかやっぱり戦略的に目玉をつくるべきだと思いますよね。いますぐいいアイデアは思いつかないが、同志社校友はいま二十五万人いますが、この校友と現役の学生の結びつきを強めることはすぐにでもできると思います。母校は青春時代の思い出の場所ですから、卒業生はみんな関心はあると思うのです。土井たか子衆議員議長から土佐の海まで色々の分野で校友が活躍していますが、名も知られずにピカリと光る仕事をやっている人も大勢います。心ある先輩は現役の学生が訪ねてくるのを待っている。就職のためだけというケチなコンタクトではなく訪ねてきてほしいですね。カネがなくとも、コーヒー一杯や昼めしぐらいは喜んでおごってくれれると思

います。学生が自分の興味のある分野の先輩に気軽に会えるシステムを同志社は考えた方がいいと思うんですね。

同志社中学、高校の国際交流もドンドンやればいい。四、五年前、大分の高校生が韓国の高校生と相互にホームステイをやったNHKの番組がありまして、それを見ておもしろかったのは、韓国の高校生なんていうのは、反日教育だから、みんな鬼か悪魔か何かのところに行くような気持ちで来たんだけど、やっぱり一週間ほどおると仲良くなっちゃって、非常にいい一週間をお互いに過ごしたというんですね。そういう具体的なプログラムをつくってやるというのも一つの手じゃないかなと思うんですね。やっぱり一緒に仕事したり、一緒に生活をしないとだめですよ。

**斎藤** ちよつと話はずれるかもしれないんですけど、話を聞いていて思い出したんですが、学生と教員が同じ目線で触れるということで、アメリカの場合はオフィスアワーがあるわけですよ。日本も制度上は同じ名前ですがオフィスアワーと呼んでいるものがあるとは思って

れども、ただ、これもやっぱり文化が違うからと言えば、それきりで終わってしまうかもしれないけど、たぶん学生側はうまく活用していないというか、あまりその意味がよくわかっていないと思います。輸入された制度の形はあるんですけども、たぶんあんまり使われてないのじゃないかなと、同志社でも使っていないんじゃないかな、想像なんですけど。

**金田** そのとおりです。

**齋藤** だからそういうものをもう少しうまく使えばと思います。ぼくは個人的には同志社の四年間で非常に得をしたと思うのは、ある先生に連なる——連なるというか、友達のネットワークで非常に得をしたことがあるんですよ。そういうものというのは、なかなか単に授業に出て大教室に座っていれば自然にできるというものじゃなくて、ある程度、その場合は先生が、要するに大教室なんかそういう話ができないから、終わって興味あるやつはお茶でも飲みに行こうというので、毎週お茶に連れていくというね。だからそういう意味では、授業とは違う刺

激というのがあったので、その点で私はすごい得をしたと思うし、非常に重要なじゃないかなアと思うんですよ。

**釜田** その辺はさっきおっしゃった学生との知的な交流といえますか、わりと大事な役割を果たす場の一つだと思わうんですね。寮なんかも昔はそうでしたね。そこに先生がおられて。同志社でも最初、金田さんが言われた昔、幾つかの寮があった。ぼくが疑問に思うのは、日本は大学紛争のころからああいう施設というのに対する評価が非常に消極的になりましたよね。消極的な方向に全国的に流れ。だからもうやめてしまおうという。アメリカではどうですか。

**金田** 全寮制の学校というのと、いわゆるコミュニティのカレッジというのは違うわけですよ、アメリカでも。例えばカリフォルニア大学でも大きな寮があって、たくさんの中がそこに住んでいるわけですよ、二十四時間。だから学生同士で話もあれば、けんかもするだろうし、いろいろあるだろうけど、それと日本のようにほとんど寮がなくなっちゃって、みんながただ下宿していて家から通うと

かいうのとはまた違う。

例えばさつき齋藤さんが言っていたコンピュータのアクセスなんかも、ぼくは同志社でびっくりしたのは、日曜日になったらキャンパス閉まっちゃうわけです(笑)。その間、全然何も使えないわけ。カリフォルニアにいたときは、いつでも自分が行きたい時にオフィスに行けるわけです。いつでもコンピュータセンターはあいているわけよ。大学院のときはこれが非常に大切だったんですよ、論文書いているときに。ところが、そういうことができる、そしていまアメ研の学生が日曜日に使いたくてあそこへ入りたかったら、「先生、判を押してくれ」と言うて来るわけですよ。特別な許可がないと入れない。だからそういうことにも象徴されるね。

**齋藤** コミュニティの場合がないんですよ、日本の場合にはそういう意味で。

**金田** 学校から学生が締め出される時がある。昔は教授が締め出されたのか何か知らんけれども、教授とか学生が学校に入れないときがある。こんなおかしな学校ないです、アメリカの大学では。



そこは使えるべきだ、二十四時間使えるべきだと言うたらちよつと無理かもわからんけど、真夜中以後朝の七時までには閉まっている、これは仕方がないかもわからない。真夜中ぐらいまでは絶対開いているんですよ、アメリカの学校というのは。

### ■ 建物を建てる時だけ 寄付を求められても

山田 ちよつと話がそれますけれど、財政の面にふれさせていただきますと、OBからの寄附が、アメリカの大学ってすごいですよ。いまでもUCCLAの教育学大学院と、それからUCCLA全体からいつも来るんですけど。つまりOBへの寄附要請みたいなものがすごいわけです。まあそんなに出せませんけれども、やっぱり私もOBとしての……

斎藤 これはすごく重要なことだと思っ  
たんですよ。アメリカの大学等では、学  
長が代わると挨拶状が各卒業生全部に来  
るわけですよ。どういう方針で臨みた  
いという施政方針演説をこちらが読み切  
れなくなるぐらい送ってくる。そのあと

で、賛同されるのであれば寄附をどう  
していただきたいとかかってくるんですが、  
日本の大学は、同志社はどうか知らない  
んですけど、何か建物を建てるから寄附  
をくださいという、そのときだけ寄附の  
お願いが来るんですよ。それだと、要  
するに突然そんなときだけ金くれって言  
われてもよくわからない。常日ごろから  
どういう方針で大学を今後運営してい  
きたいかを卒業生に対して説明しておけ  
ば、ああ、そうなのかなということはや  
っぱり起こると思うんですよ。

だから、この間もアーモストの学長が  
同志社へ来て（巻頭グラビアに関連記  
事）、小さい会ではありましたが、意見  
を交換して、そしたらやっぱりちよつと  
ぐらい寄附しようかなと思う気になるも  
のでね。そういうこと一切せずに、何か  
のときに何とかセンター建て替えるので  
寄附くださいだけでは、なかなかOBも  
動かないと思うんですよ（笑）。

金田 とにかく校友会活動が全然違う  
ね。とにかくアーモストのような小さな  
学校で季刊で、だから一年に四回、もの  
すごく分厚い立派な雑誌が全校友に送ら

れてくるわけですよ。そしてさっきも  
話が出たように学長が代わるとか、それ  
からまたスポーツのリユニオンがあると  
かいうたらワァーと来るわけ、向こうか  
ら。そのかわり、ぼくのクラスなんて六  
割以上が毎年寄附するわけですよ。クラ  
スで六割以上ですよ。だからゲレティ  
ー学長の話では、アーモストの寄附の中で、  
実際にその年に経常費の中で使える寄附  
というのは一〇%以下らしいけど、だけ  
ど、結局寄附が基金のもとになっていて、  
その基金が予算の大体三分の一なんです  
よね。だけど、このためにはものすごい  
インプットが要るわけですね。やっぱり  
それだけの投資をしなければいかんし、  
人がかかわらないかんし。もちろんぼく  
らのクラスで、例えば一学年二百五十人  
のクラスなんだけど、そのうち二十五人  
ぐらいがクラスの募金の委員になってい  
る。そして電話かけてきよる。それで、  
「おまえ、この前はちよつと出してもちろ  
けど、もうちよつと上がらんか」という  
ような話になるわけです。もちろん最初  
からそんな話はしないけどね（笑）。この  
辺が日本はまだ。

齋藤 たぶんこれ、あいまいさの一つの例だと思うんですね。何となく卒業生だからわかるだろう、金を出してくれというね、そういう何か暗黙の了解があるのじゃないかという気が私はするんですね。

山田 そうですね。日本の私立大学って募金事業と経営、アドミニストレーターと研究職が一緒になっている部分があるんでしょけど、アメリカの大学ってだいたいそこは分かれておりますよね。ですからOBとか、金田さんおっしゃったように大変な部分、これからそういう職員の役割というのは非常に大きな問題になっっていくんじゃないかなと思っっているんですけど。

釜田 そうですね。同志社もようやく校友課というのが去年の十二月にできました、そういうふうな方向を指すべく、いまそういう研究をしております、それからパブリック・レイシヨンス局というのが広報以外に、それは大きくは一つは同志社を全国のいろんな高校に紹介していくということ、校友のお金集めをどうしたらいいかというふうなこと、

それから社会人に大学をもう少し説明していこうという、こういうふうな役割をまず帯びて、この春から発足をしたというところがございます。これから少しずつそういうことができてくるんじゃないかと思っています。

### 国際競争の中での同志社の将来

釜田 長時間でお疲れのところですが、最後にもう一言ずつぐらいお願いしたいのですが、さつき国際競争力とおっしゃった、やつぱり次の世紀は恐らくいまの企業と同じようなことになると思うんですね。そのときにずばり同志社は国際競争の中でどうなるのか、いけるかどうかだけちょっと――

金田 ぼくはいまのところだったら、第三国の人の意見がいちばん正しいと思うんですよ。行けるならアメリカへ行く、その次に行くならイギリスへ行く、それからヨーロッパ――

齋藤 しようがないから(笑)。  
金田 しようがないから日本で途中でとまらなと。だけど、日本でとまって、こ

れはとまっているだけで次はアメリカへ行くんだと。だからここはステップ。

土野 それは留学生の話で、二万人の学生のことをどうするかという問題。

金田 これはもつと大切な問題だ。

釜田 いや、ほんと、そこなんですよね。二万人の学生は毎年毎年、そのうち四、五千が出て行くんですね。これが本場に競争力がついて、競争世界でやっっているかどうか。

金田 だからその中で何人が例えば世銀とか国際通貨基金、ぼくは経済学関係からそれを言うんだけど、そういうところでね、毎年幹部候補生として二十五人選ばれるわけよ。その連中と競争しているかという問題。ぼくが向こうへ行くとき、「おまえ、だれか日本人知らんか」と言われる。ところが、ぼくが知っている日本人の学生でこの連中と競争できるかなアと、そしてその次に今度はかわいいと思うだとなるわけよね。

齋藤 私が勤める大学の新しい学部は一年生しかない。要するに高校生からずっと大学になって、実績的にまだ高校生ですね。その学生にある先生がアメリカ

の小学校で使う教材でもって経済を教えようとした。例えばサプライド・ディマ

ンドとか、そういうものを一切使わずに経済の感覚を得させるためのお話があるらしいんですよ。それがある韓国人の先生が一年生に配ってやらしたら、日本の大学生はアメリカの小学生がわかるようなことすらも自分たちで読み取れなかったというので、すごいシヨックを受けておられたんですけれども。だからそういう意味では、先ほど留学生が日本人の学生を見て失望するところと同じように、私がいるところは四十何人専任がいるんですけど、半分の二十何名が外国人の教員なんですけれども、ほかの国から来た先生が日本の大学の学生はレベルが低いというので口をあけてしまっているんです、ある意味では。

山田 確かにシヨック受けますよね。

斎藤 だからそれを教えている教員のほうも非常にカルチャーシヨックを受けるんですけれども、やっぱりそのプロセスを少しずつ転換していくかしらうがないんじゃないかなという気が非常にしています——

金田 そのプロセスというのは。

斎藤 要するに日本の高校までに行われているような教育じゃなくて、先ほどセルフェスティムという問題がありますけど、自分で考えて、自分で調べて、自分でまとめて、自分で発表してという、そういうことをやっぱり少しずつやるしかしようにないと思うんですね。それは本当の意味で、例えば外国に出たときに、例えばインド人でイギリスの教育を受けてケンブリッジを出たような人と競争できるかどうかというのはちよつとわかりませんけれども、でも少なくとも英語が上手か下手かというような問題じゃなくって、自分で考えて、その考えたことをぶつけていって、それを相手と議論できるといいますか、それはただ一方的に言いまくっているとかそういう意味じゃなく、ちゃんと話ができるといふか、そういうふうな意味で、同じ土台に立てることができれば、ある程度はやっていくんです。

山田 あと、女性の観点から言わせていただいてよろしいですか。実は向こうに行ったときに思ったんですけど、例なん

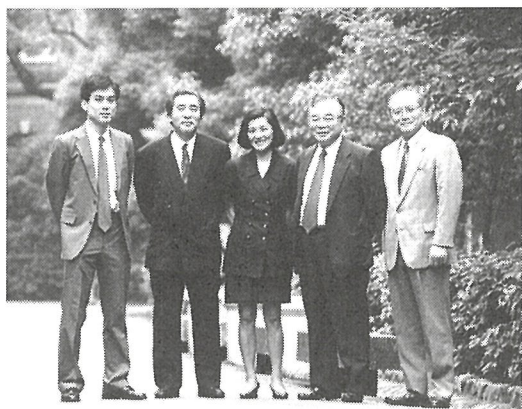
ですが、筑波大学の女子学生で、すごく活躍した人がいました。どんどん外国に出てきてますし、そのあとちゃんとした職業、研究職としてなんですけど、どんどんほかの国にも出ていくし、競争しているわけです。同志社の女子学生ってけっこうレベルが高いと思うんですけども、向こうに行つたときに、ほとんど会つたことがないんですよ。それで、アーモストカレッジへのスカラーは女性も多いいんですか。

釜田 多いですよ。

山田 けっこう私の年代でも卒業して奥様になつたりして、せっかくある才能を生かせない方も多いいんですけど、いますごく女性の進学率高いですよ。それで同志社の比率も高くなつてきていると思うんですけど、女子学生を今度どんな社会で生かすというふうなことが、すごく重要じゃないでしょうかね。

斎藤 ぼくも学生を見ていて、一年生で例えば就職試験をすると、八五％は女性になりますよ。

土野 ぼくもそう思うなア。ぼくは会社で八百人ぐらい応募してきて二十人残し



て、役員面接をやって、四人とつたんですけど、圧倒的に女性のほうが優秀ですよ、考え方も、出版社に勤めたいという動機も度胸もある。何で日本の男はこんなにだめになったのでしょうか。

齋藤 昔からだめだったんかもしれないんですけど(笑)。

金田 これは学科を教えていてもそうですよ、同志社でね。よくできるのは女の子。

土野 二十一世紀の同志社を女性の卒業生に託すようなプログラムをつくるのがいちばんよろしいんじゃないですか(笑)。

金田 だけどほく思うんだけど、やはり若い女性、結婚ということを考えるでしょう。そしたらそれまでの間の会社勤めって考えるでしょう。だから自分ひとりでプロフェッショナルのことをやるんだということを考える人は、ものすごく少ないんじゃないでしょうか。

齋藤 でも、それはだんだん変わっていると思うんですね。例えば同志社の就職課で女性の観点から就職ガイダンスをしてくれる人がいるのかどうなのか知らないんですけど、そういうことがすごく今後大事になると思うんですよ。たぶん多くの大学は、そんなところまでまだ手が回ってないと思うんです。だから女性の観点から見ると、そういうキャリア・ア・デイベロップメントですよ、そこにある程度異文化との接触が入ればなお理想なんですけれども。

金田 いや、だけど、例えば国際機関な

んで男女の区別なんてないわけですよ。ところが日本の女性は行かないわけ。

齋藤 いや、最近そうでもないですよ。

山田 最近ふえてます。

金田 ああ、そうですね。

土野 いや、これしかし、卒業生がみんな国際機関に行くわけじゃないから。

金田 もちろん。

土野 やっぱ二万人の学生を本当にどういうふうにして、国際化時代に同志社で教育を受けてよかったという実感をもって世の中に送りだすかを同志社の課題にしていた方がいいですよ。外におるほくらなんかもできることは何でもやりますから。これやらないと、本当にこれから大競争時代になりますからね、大学は大変です。いつまでも新島襄先生へのノスタルジアだけではだめでしょう。同志社二十一世紀委員会を識者を集めてつくってみてはいかがでしょう。

釜田 そうですね。ありがとうございます。長時間にわたりまして、本日は貴重なご意見をちょうだいしまして本当にありがとうございます。

(一九九六年六月二日卒業生ラウンジにて収録)